

# 北陸地方ニ於ケル聾啞兒ノ研究

## 第 9 2年8ヶ月ノ経過ヲオキテ検索 セル聴覺ノ變動ニ就テ

金澤醫科大學耳鼻咽喉科教室(主任松田教授)

豊 田 文 一

(昭和11年6月12日受附)

### 目 次

|                |         |
|----------------|---------|
| 第1章 緒 言        | 第4章 總 括 |
| 第2章 検査方法並ニ被検人員 | 引用文獻    |
| 第3章 検査成績       | 附 表     |

### 第1章 緒 言

曩ニ著者ハ石川縣立聾啞學校兒童ニ就キ聴覺ノ検索ヲナシ、聴覺未ダ消失セザルモノノ多數ニ存スルヲ報告シ、該成績ハ聾啞兒ノ口話教育指導ニ對シ、裨益セン所尠カラザリシヲ聞ケリ。而シテ聾啞兒ノ聴覺ニ昭和7年6月第1回検査以來如何ナル變化ヲ來タセルヤヲ知ルコトハ極メテ意義深キ事柄ニシテ、著者ハ昭和10年2月同一兒童ニ就キ再ビ之ガ検索ヲ行ヒ、2年8ヶ月ノ経過ニ於ケル聴力ノ變動ヲ調査シ、興味アル事實ヲ見出シ、今後ノ聾啞教育ノ一助ニモナラント思惟セシカバ、茲ニ其ノ成績ヲ敘述セントスルモノナリ。

### 第2章 検査方法並ニ被検人員

検査方法ハ本研究第4ニ於テ述バタルガ如ク Bezold-Edelmann 氏音又ヲ使用シ、其ノ方法ハ前検査ト同様ナルヲ以テ省略ス。

被検人員ハ石川縣立聾啞學校兒童ニシテ、昭和7年6月聴力検査ヲ行ヘル當時第4學年在籍中ノモノ(鈴木學級)ニシテ、昭和10年2月ニ於テ第6學年タル13名ニ就キ行ヘリ。蓋シ同一條件ノ下ニ教育サレシ、同一兒童ナルヲ以テ、検査成績ニ關スル誤差モ極メテ尠キモノナラント思惟シ、鈴木學級ヲ選ベリ。前後検査ニ於ケル期間ハ約2年8ヶ月ナリ。

### 第3章 検査成績

聽域ノ變動ニ就キ觀察スルニ被檢耳26耳中

|                 |    |
|-----------------|----|
| 上音階上昇シ下音階下降セルモノ | 7耳 |
| 上音階上昇シ下音階上昇セルモノ | 4耳 |
| 上音階下降シ下音階下降セルモノ | 3耳 |
| 上音階下降シ下音階上昇セルモノ | 2耳 |

- 上音階變化ナク下音階下降セルモノ 2 耳
- 下音階變化ナク上音階上昇セルモノ 1 耳
- 殘聽ナキモノニツノ發現セルモノ 5 耳
- 依然トシシテ殘聽ナキモノ 2 耳

即チ聽域擴大著シキ上音階上昇, 下音階下降セルモノ7耳, 全聾耳ニ殘聽ノ發現セルモノ7耳, 聽域ノ縮少即チ上音階下降シ, 下音階上昇セルモノ2耳ニシテ, 他ノ場合ニ於テモ聽覺ノ縮少ヲ來セルモノ極メテ尠シ. 更ニ之ヲ詳述セバ第1表ニ示ス如ク, 聽覺増進セルモノ左9耳, 右7耳, 増減ヲ認メ難キモノ左1耳, 右5耳, 減退セルモノ左3耳, 右1耳ニシテ, 聽覺ノ増進顯著ナルヲ認ムベシ.

更ニ之ヲ原因別ニミルニ, 先天性聾啞, 5名, 後天性聾啞8名ニシテ, 聽覺増進セルモノ前者ニ於テハ7耳, 後者ニ於テハ9耳, 變化ナキモノ各々3耳ナルモ, ソノ減退セルモノ先天性聾啞ニ於テハ認メズシテ, 後天性聾啞ニ於テノミ4耳アリキ. (第2表)

次ニ聽域ヲ測定セルニ昭和7年ニ於ケル検査ニテハ左耳平均3.70オクターブ, 右耳平均3.65オクターブ」ナリシニ, 昭和10年ニ於ケル検査ニテハ左耳平均4.47オクターブ, 右耳平均4.38オクターブ」ニシテ, 其ノ平均値ニ於テモ顯著ナル増進ヲ來セルヲ知レリ.

第1表 左右別ニヨル聽域變化ニ關スル表

| 左右別<br>聽 域 | 左  | 右  |
|------------|----|----|
| 増 加        | 9  | 7  |
| 變化ナシ       | 1  | 5  |
| 減 少        | 3  | 1  |
| 計          | 13 | 13 |

第2表 失官原因別ニヨル聽域變化ニ關スル表

| 原 因<br>聽 域 | 先天性<br>聾 啞 | 後天性<br>聾 啞 |
|------------|------------|------------|
| 増 加        | 7          | 9          |
| 變化ナシ       | 3          | 3          |
| 減 少        | 0          | 4          |
| 計          | 10         | 16         |

第3表 聽域測定ヨリミタル變化ニ關スル表  
(單位オクターブ)

| 姓   | 1932 |      | 1936 |      |
|-----|------|------|------|------|
|     | 左    | 右    | 左    | 右    |
| 本 島 | 4.5  | 1.5  | 3.0  | 1.5  |
| 今 村 | 1.0  | 3.5  | 5.5  | 4.0  |
| 内 田 | 10.0 | 8.5  | 8.5  | 9.0  |
| 脇 坂 | 7.5  | 8.0  | 9.0  | 8.0  |
| 村 本 | 6.0  | 9.5  | 7.5  | 7.5  |
| 前 田 | 3.0  | 3.0  | 5.5  | 6.5  |
| 榮 野 | 5.5  | 6.0  | 6.0  | 6.0  |
| 出 野 | —    | —    | 4.0  | —    |
| 三 田 | 8.0  | 2.5  | 4.0  | 4.0  |
| 中 浦 | —    | —    | 1.0  | 1.5  |
| 中 島 | —    | —    | 0.5  | 4.0  |
| 宮 地 | —    | 2.0  | —    | 3.0  |
| 野 田 | 2.5  | 3.0  | 3.5  | 3.0  |
| 平 均 | 3.70 | 3.65 | 4.47 | 4.38 |

### 第4章 總 括

聾啞ニ於ケル聽覺障碍ハ主トシテ感音器障碍ニシテ, 傳音器障碍ニヨリ惹起セラル、コト極メテ尠シ. 即チ蝸牛殻ニ於ケル基礎膜纖維或ハ Corti 氏器ノ病變, 更ニ聽神經ノ廢絶, 或

ハ聽覺中樞ニ於ケル病變ニ基クモノニシテ、其ノ大多數ハ既ニ長日月ヲ經過シ、之ガ恢復ヲ望ムコト不可能ナリ。曾テ加藤享氏モ聽覺ノ増進ニ就キ報告サレタルモ、發音練習ニヨリ之ガ發達ヲ來ス可キヤ否ヤハ疑問視セラレシ所ナリ。何故ナレバ感音器系統ノ解剖學的變化ヲ再生セシムルコトノ不可能ニシテ、且ツソノ消失セル機能ノ恢復シ能ハザルハ疑フベキ餘地ナシ。然ルニ前章ニ於テ述ベシガ如ク被檢人員ノ大多數ニ於テ顯著ナル聽覺ノ増進ヲミタリ。殊ニ全聾兒ニ於テモ1耳ヲ除キ聽覺ノ發現ヲミタルハ興味アル事實ナリ。内耳ニ於ケル音響感覺ハCorti氏器及ビ基礎膜ニヨリテ營マル、モノニシテ、或ル振動數ヲ有スル音波ニ對シテハ、基礎膜上ノ一定部分ニ於ケル纖維ノミガ振動ヲ行フトナスハHelmholzノ假説ニシテ、今假ニ此説ニ從ハンカ、聾啞兒ニ於テ殘聽ヲ認メラル、コトハ該膜ノ殘聽々域ニ相當スル部位ノ健常ナルニ基クモノナリト斷ゼザルベカラズ。而シテ聽覺ノ増進ヨリ之ヲ考フルニ、萎縮セル基礎膜纖維ノ隣接纖維、即チ聽覺機能ヲ遂行シ得ル纖維ガ、該部ノ固有振動數ヲ有スル音響ニ反應スルニ止マラズ、病變ヲ蒙レル部ノ振動數ニモ反應シ、此ノ如キ聽覺發現ヲ來セルモノニ非ズヤ。殘聽ヲ有セザリシモノニ於テモ聽覺ノ發現ヲミタルハ、音叉振動刺激ニヨリ覺醒シ能ハザリシ聽覺モ、2年8ヶ月ニワタル口話教育ニヨル聽覺練習ニヨリ基礎膜病變中ソノ比較的輕度ナリシ部分ガ音響刺激ニ反應セシモノト考フベキナリ。

次ニ檢査成績ニ於テ兩耳共全聾ナリシモノ3名中總テニ於テ兩耳或ハ片耳ニ聽覺ノ發現ヲミ、又聽域ノ擴大ヲ大多數ニ於テ認メ得タルコトハ口話教育進展ノ爲慶賀スベキコトナリ。尙聽域ノ縮小ヲ來シタルモノニツキテハソノ原因ヲ奈邊ニ求ムベキヤ、其説明ハ洵ニ困難ニシテ、聽覺ノ減少セルモノハ後天性聾啞ニ於テノミ認メ、先天性聾啞ニ於テ認メズ。被檢耳ノ寡少ヲ以テ之ガ原因ニ就キ言及スル能ハズ。更ニ此ノ如キ檢索ノ機ヲ俟チテ考察セント欲スルモノニシテ、今日ハ單ニ檢査成績ヲ記載スルニ止メントス。

以上敘述セル所ヲ約言スレバ、聾啞兒13名(鈴木學級)ニ就キ昭和7年6月ニ於ケル聽覺檢査ト昭和10年2月ニ於ケル聽覺檢査成績トヲ對比シ、其間、聽力ノ著明ナル増進ヲ認メシモノニシテ、口話教育ハ聾啞兒ノ聽覺増進ニ多大ナル効果ヲ及ボシウルモノナルコトヲ示スモノトイフベシ

#### 附 記

著者ハ本篇ヲ以テ北陸地方ニ於ケル聾啞兒ノ研究ヲ一先ヅ完結セントスルモノニシテ、本研究ニ對シ終始御指導御鞭撻、且ツ御校閱ヲ賜リタル松田教授ニ深甚ナル謝意ヲ表シ、又本研究ニ對シ多大ナル援助ヲ與ヘラレタル前講師坂之博士、種村助教授並ニ教室諸兒ノ御厚志ヲ謝シ、併セテ著者ト共ニ聾啞兒ノ幸福増進ノ爲ニ努力ヲオシマレザリシ、石川縣立聾啞學校前校長笠井貞康氏、現校長竹屋藏氏、同校鈴木忠光氏、中村北次郎氏他職員諸氏ニ多大ナル敬意ヲ表ス。

#### 引 用 文 獻

- 1) 中村登, 聾啞教育ト殘聽問題, 耳鼻咽喉科臨牀ノ實際 .
- 2) 豊田, 石黒, 前田, 北陸地方ニ於ケル聾啞兒ノ研究, 第4, 十全會雜誌, 第40卷, 第11號.

